慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H. Jerome, Mechanization in Industry, 1934
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.8 (1935. 8) ,p.1219(153)- 1224(158)
JaLC DOI	10.14991/001.19350801-0153
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350801-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H. Jerome, Mechanization in Industry, 1934.

藤林敬三

世界大戰の終末以後一九二九年に至る十年間に於いては、高賃銀、移民の制限、資本財の比較的低廉、夥多にして低利の資本等の産業技術の發展に對する好條件が、アメリカ産業の諸部門に於ける急速なる機械化の進展を可能にした。このアメリカ産業の生産技術の基礎は、世界恐慌の開始と共に、根本的には新經濟組織の問題を提起しつゝ、また多くの經濟的諸問題、就中技術の發展に因る失業、所謂 Technological unemployment の問題を顯著ならしめた。既にかくの如き事情が生産技術に關する經濟學的研究を刺戟することは當然である。先年テクノクラシーの思想が全米を風靡し、更らにまた忽ちの間に全世界の視聽を惹いたことに就いては、善かれ惡かれ、吾々は此處に多少の根據を求めることが出來る筈である。しかしこのテクノクラシーの思想とは別に、その以前から、またその後今日に至るまで、生産技術に關する社會科學的研究は徐々に學者の關心を高めつゝあるやうに思はれる。そして吾々は既にこの方面に於いて最近注目すべき可成りの文獻を指摘することが可能である。(註) 私が此處に紹介しやうとする、ハリー・ジェロームの「産業の機械化」に關する研究は、特に最近のアメリカ産業に於ける生産技術に關する實證的、統計的研究として、生産技術の經濟學的、また經營學的研究に興味を有するものに對して、正に推奬に價するものゝ一つである。

H. Jerome, Mechanization in Industry, 1934.

（註）讀者の參考のために此處にマンフォードの著作を指摘して置かう。彼の著作はその卷末に可成多くの、主として英米の技術研究の文獻を示して下れて居る。L. Mumford, Technics and Civilization, 1934, p. 447 ff.

ジェロームの著作は次ぎの如き十章からなつてゐる。（一）摘要、（二）勞働節約的（技術的）變化の類型、（三）諸工業に於ける機械化の變化、（四）非工業的方面（農、鑛、交通、土木、建築業その他）に於ける機械化の變化、（五）原料及び生産物運搬に關する機械化の變化、（六）機械化の變化の測定、（七）機械化程度の差異、（八）機械製造工業の諸特徴、（九）機械化の速度決定の諸要因、（一〇）機械化の諸結果。先づ著者の研究は諸種の産業に關する實地調査（質問紙に依る調査と踏査）と政府の諸統計に基いてなされたものであることを注意して置かう。その第三、四、五の三章はアメリカ産業の諸部門に於ける生産技術の發展に關する主として序述的部分をなして居り、これに續く諸章は生産技術の發展に關する科學的理解を吾々に提供しやうとするものである。この内特に第六章は機械化の發展を正確に認識し得んがための諸種の統計的操作を示し、第七章は諸産業間に於ける、更らに地域的に、賃銀水準の相違に依り、また經營の規模の大小に依つて機械化の程度が各々如何に異るかを現實に確證しやうと試みてゐる。そして最後の第十章は生産技術の發展、即ち勞働の節約を實現する機械化の進展の諸結果を論じたものであるが、特に著者は此處で勞働の量と質、換言すれば雇傭勞働者數と勞働熟練度に對する變化的影響の現實的確證の問題を重要視してゐる。

ジェロームの著作は主として世界大戰の終末以來一九二九年の世界恐慌に至る十年間のアメリカ産業の諸部門に於ける技術的發展の現實的研究を企てたものであるが、その諸種の統計的操作に依つて生産技術の發展に關する諸樣相の科學的理解を進めやうとした所に、正に著者の苦心が存し、本書の科學的價値が存するものであると見做されなければならない。そして從來技術に關する吾々の科學的認識に於いて稍々漠然としてゐた多くの見解が、彼の研究に依つてより現實的に明白ならしめられるための方法が與へられてゐる。この意味に於いて、未だ生産技術の社會科學的研究に對して充分の關心を持つてゐない吾國の諸者に取つては、ジェロームの著作は敎へる所の最も多いもの〻一つである。

ジェロームの著作は右の如き特質の内に、吾々に對して生産技術に關する經濟學的認識に於いて注目すべき多くの點を含んでゐるのであるが、此處にその二三の點を例示すれば次ぎの如くである。

從來一般に低賃銀が生産技術の發達に對して寧ろ妨害的な條件であると見做されてゐたのであるが、このことはジェロームにあつては、アメリカの南北兩地方の諸産業に於ける技術的發展の地域的相違と共に、大體南部地方の賃銀の相對的に低廉であることが、同地方に於ける諸産業の機械化程度の稍々遲れてゐるといふ事情と相對照して、略々確證されてゐる。また機械製造工業に於ける生産費の分析的研究から、彼は移民の制限に依る不熟練勞働者の供給の減少が假令彼等の勞働賃銀を多少增大せしめても、機械製作の生産費がそれに依つて蒙る影響は甚だ僅少であることを敎へてゐる。更らに生産技術の發展は素より發明に依つて促進せしめられるのではあるが、この技術的發明は今日の經濟社會に於いては偶然的、突發的である――換言すれば天才的發明家の個人的材能に因る――といふよりは、寧ろ社會の必要、經濟的要求に依つて基礎づけられて居り、從つて技術的發展は徐々であり、連續的である。それ故にこそまた技術的發明が組織化せられ、制度化せられ得るのである。ジェロームは凡そかくの如き見解を繰返し述べてゐるのであるが、それはまた他方に於いては、生産技術の發展が單に技術學的可能性だけに依つてのみ實現せられるものではなく、その可能性の上に企業の利潤の計算的考慮が加はらなければならないとい

ふ事實と共に、吾々の認めて置かなければならない點である。そしてまたこれ等の事實は發明に因る新機械化方法の實施――即ちそれが發明せられ、販賣せられ、一般にその實用的、經濟的價値が認められて廣く採用せられてから、最後に更らに新しい方法に依つて驅逐せられるまで――に關するジェロームの特有の研究に依つて裏づけられてゐる。

通常技術的發展は勞働の節約といふ意義を持つものであると考へていゝのであるが、ジェロームに從へば、勞働の節約は勞働の（1）努力の强度 Intensity of effort を輕減するといふ方面と、（2）費される時間の短縮との二つの方面を持つて居り、兩者は互に密接な關聯にあるが、彼は主としてこの第二の方面に問題を限つてゐる。しかもまたこの意味に於ける勞働の節約は、彼に於いては、更らに次ぎの二つの意味に區別して考へられてゐる。即ち（一）時間當り生産額の增大――勞働生産力の增大と、（二）勞働者の排除 labor displacement――雇傭勞働者數の減少とがこれである。かくの如き概念上の區別の問題は暫く別として、この後の意味に於ける勞働の節約、機械化、即ち生産技術上の進歩は軈て Technological unemployment と關聯する。しかしジェロームに從へば勞働者の排除は次ぎの四部面に就いて考へられねばならないものである。

（1）特定の作業過程から――作業的排除。

（2）全體としての一工場から――工場的排除。

（3）一職業から――職業的排除。

（4）全體としての一産業から――産業的排除。

即ちある作業過程の技術的更新に基いて、假りに從前と同一額の生産が行はれるとすれば、確かに當該作業からは一部分の勞働者は不要のものとして驅逐せられる(1)。そして或は彼等は當該工場から排除せられることがあり(2)、また同一工場或は他の工場に於いて從來とは異つた作業に職を見出すことがあり(3)、更らに或は全く別の産業部門に職を見出して移動することもある(4)。しかしその何れにも屬することなく勞働者が、全く失業の狀態に陷る場合は完全な勞働の排除であり、この完全な勞働の排除が技術的原因に基く限り、それは所謂技術的失業である。かくの如き勞働者排除の數量的確證はその個々の場合に就いて確證される筈である。しかし事情は現實的には甚だ複雜であつて、それは簡單に處理され得るものではない。蓋し現實の場合としては生産技術の更新は多くは同時に從前に比較してより多量の生産を實現し、また時に生産の規模の擴大を伴ふからである。其處で勞働者の排除は現實の場合 actual displacement から區別して、推定的な constructive 計算が行はれることゝなる。そしてジェロームは種々なる場合のこの推定的計算と、各産業部門に於ける綜合的勞働者排除の推定的計算の諸統計的方法とを示してゐる。この點に於いて吾々の敎へられる所はまた甚だ大である。

しかし乍ら技術的失業、更らに恒久的失業の問題に關してはジェロームは甚だ樂觀的であつて、配給産業並に service industry の方面では勞働の需要は增大して居り、且つまた職業統計の示す數字は從來決して職業人口の減少を示してゐない、唯だ失業者が再び職を見出すまでには相當の期間を要し、從つて勞働者の排除がより急速であれば、それ丈け少くとも一時的失業者群は增大するといふに過ぎない。しかし吾々はこのジェロームの樂觀論に贊同する前に、何故彼が失業統計を利用してゐないかを疑はざるを得ないし、また事實の問題としては彼が殘してゐる最近の問題、即ち一九二九年の恐慌勃發以來の産業事情の考慮を充分にして後それは問題とされていゝものである。

H. Jerome, Mechanization in Industry, 1934.

少くとも今回の世界恐慌が從前の資本主義恐慌と多少とも異なるものであることを認めるものは、同時にその理由の一つを世界各國に於ける急速なる產業技術の發展、特に大戰後のそれに求めることが出來であらう。しかもジェロームの研究はかくの如き考慮を些少だに含んでゐないし、またこのことは同時に生產技術の發展が究局資本主義的經濟生活の全般に關聯して考察さるべきであるに拘らず、彼自身は宛かも森林中に入つて個々の樹木の研究には稍〻詳細ではあるが、そのために却つて全體としての森林の研究を忘却してゐるといふ批評は、到底これを免れることは出來ないであらう。勿論彼自身はその研究に於いて生產技術に關する經濟的問題の全般に渡ることを企圖してゐるものではないことを明言してはゐるが、吾々の右の批評は技術の經濟學的研究に關心を有するものに取つては輕視さるべきことではない。

尙ほ本書はニュー・ヨークの國民經濟研究所の公刊書第二十七卷として出版せられたものであつて、價格は三弗五〇仙（丸善賣價十二圓七十五錢）である。

昭和十年七月六日稿

Teiichi Katsumoto: Wirtschaft und Philosophie

武村忠雄

本書は本塾先輩にして、現神戸竝に大阪商大の經濟哲學の講座を擔當されつゝある勝本鼎一氏が、右兩大學に於ける經濟哲學の教材として編纂されたものである。氏は本塾卒業後、左右田博士の門に學び、一意專心經濟哲學の研究に沒頭され、博士の歿後と雖も、一人よく左右田哲學の正統を守り、正にこの方面に於ける權威であり、既に博士滯獨中の業績たる Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze. Stuttgart, 1911. の邦譯者として令名あり。

蓋し、經驗科學――經濟學もこれに屬す――は、その成立と發展の歷史的順序より見るならば、先づ最初には或る認識方法を無批判的に受入れ、これを暗默の內に前提しつゝ、一定の發展段階に於ける經驗科學を打立てるが、この經驗科學の發展が或る程度に達するや、各種の經驗科學によつて與へられた認識方法を素材として、これを批判し、認識方法一般を吟味せんとする哲學的要求が起る。この哲學による認識方法の意識的批判によつて、經驗科學は更に高き發展段階に達す。然し既に到達された認識方法を以つてしては說明し得ざる新しい現象に直面するや、各經驗科學者は夫々自己の特定の研究領域に於て、無批判的に或は暗默の內に新たな認識方法を採用しつゝ新たな現象を說明する。そして再び經驗科學の發展が或る程度に達するや、認識方法一般の吟味として新たなる哲學が成立する。夫故、認識方法を無批判的に或は暗默の內に前提する經驗科學と認識方法そのものを意識的に批判す